

ロシアにおける言語とエスニック・ アイデンティティの諸問題

森 岡 修 一

はじめに

かつてソ連の著名な心理学者のルリヤは、自著の刊行にあたって、1930年代当時の社会的変革が「人間の認識過程の構造にどのような根本的変化をもたらしたか」を調査研究するための絶好の時期と場所を提供してくれた、と述懐している⁽¹⁾。ソ連邦の崩壊および再建という歴史的な「社会的変革」に立ち会ってきたわれわれも、ルリヤと同様、人間の社会的本質を調査研究する貴重な時期と場所を共有する機会に恵まれたと言えるだろう。民族問題と経済問題に関してゴルバチョフは無為無策であるがゆえに政治の表舞台を去る、と予言したのはR.G.カイザーであったが、エリツィン、プーチンにおいても、民族問題は何ら解決されなかった。それどころか、プーチン政権に移行してからは経済問題の成果はともかくとして、2002年の10月にモスクワの劇場が武装集団によって占拠され100名を超える犠牲者を出したのをはじめ、チェチェンなどの武装勢力の活動はさらにその激しさを増し、民族問題はいつそう混迷の度を深めている。小論草稿準備中（2004年9月以降）も、マスメディアのニュースは、ロシアの北オセチア共和国における学校占拠事件とテロによる痛ましい犠牲者の続報を流し続けてきた。

とはいえ、当報告ではこれらの問題を直接扱うことは企図していないし、また筆者にはその能力も持ち合わせていない。ここでの視点は、ベレストロイカ以降のロシアにおける地域問題と教育・文化・学習とのかかわりを、エスニック・アイデンティティ形成における「言語」の機能というフィルターを通して分析・検討することによって明らかにするところにある。諸民族の相互接触・交流の増大とともに、民族帰属の問題は文化的同化過程として顕在化する。本研究では、広義のロシア（バルト三国など旧ソ連邦領を含む）におけるエスニック・グループの文化項目における活性化を指標とした文化的同化と多様化の具体的分析を行うことによって、「言語」を中核としたエスニック・アイデンティティの形成過程を考察する。

ソ連邦の崩壊は、すべての社会的位相においてエスニック・アイデンティティの視点そのものを大きく改変させた。ロシア人の地位が当該共和国の基幹民族の地位と逆転するケースも多く、ロシア人の権利保護問題が浮上するに至り、ロシア人のエスニック・アイデンティティは質的变化を見せてきている。エスニシティと文化的アイデンティティの問題を考える場合、これまでは非ロシア人少数民族問題が主要テーマとなることが多かったが、今や、多数派たるロシア人自身も居住地域によっては「マイノリティ」に転じるなど深刻なアイデンティティ・クライシスに直面している。石郷岡 建はロシアの地政学の教科書の中に「ソ連崩壊で失われたもの、もしくはソ連崩壊後の結果」が10項目列挙されていることを指摘している⁽²⁾。その項目のほとんどが崩壊後のネガティブな評価に関連するものであるが、その中でもとりわけ「ロシア民族はユーラシアの東西の軸にばら

ばらに広がり、寸断された民族の一つとなった」という項目が目を引く。連邦崩壊後モスクワで刊行されてきた季刊雑誌『ディアスポラ』の論文の多くが、散居民族のロシア人という視点で執筆されているのも、そのことと関係が深い。

ボガトヴァは2003年に、モルドヴァ居住のロシア人、モルドヴァ人、タタール人などのエスニック・グループに対して「諸民族を区別する指標」についての質問調査を行い、以下のような結果を得ている⁽³⁾。同調査では複数回答となっているため総計は100%を超えるが、就中どのエスニック・グループにおいても「言語」が群を抜いて高率である（約70%前後）ことを見逃すことはできない。以下、平均値としては民族的慣習（57.4%）、宗教（36.4%）、性格特性（29.2%）と続き、タタール人にとっては言語（75.8%）とともに宗教（51.5%）の選択率がとりわけ高いことが特徴である。一般にモルドヴァ人、タタール人はともに、散居性と母語喪失率が相対的に高いエスニック・グループとして知られており、特にタタール人はタタール自治共和国（タタルスタン共和国）、ヴォルガ・タタール、クリミヤ・タタールなどとともにわれわれになじみが深い。彼らはムスリムを基層とした強力なエスニック・アイデンティティを保持しようとする傾向が強い。

これに対してモルドヴァ人にはロシア正教信者が多く、ムスリムとは異なるプロフィールをもつ。前述のボガトヴァの調査はモルドヴァを対象にしたものであったが、<表1>に見るように、基幹民族のモルドヴァ人とタタール人との民族的親和性は相互の選択率が7ポイントほどの差しか見られないのに対し、宗教に関しては相互選択率が約36ポイントの大差となっており、ロシア正教徒の多い当該地域のモルドヴァ人のほうが、宗教的要素についてはムスリムを信仰するタタール人よりもトレランスが低いことを示している。

チェプロフなどの調査でも、タタール人が自民族の慣習や伝統を守る傾向が強く、親切、愛想の良さ、几帳面、仕事好き、文化的、公正などの項目で自己ステレオタイプに高い評価を与えていることが報告されている。ところが後述するように、同じタタール人でも、1999年にマリヤ・ゲルシモフが調査したモスクワ居住のタタール人は相対的に自己評価のポイントが低く、前述のタタール人のプロフィールとは大きく異なっている。このことだけを以てしても「タタール人」「モルドヴァ人」といった一般的名称による命題定立がいかに危険であるか、また彼らの民族的特性を論ずる際には地域性の要因がいかに重要であるか、ということが明らかであろう。

当然のことながら、この「地域」は共時性のみならず、通時性を持つ。つまり命題は「A時代（年）におけるB（地域）のC人（エスニック・グループ）は・・・」という公式によって構成されることになる。たとえば、1992年の7月から8月にかけてモスクワ大学世論研究所等が中心となっていたモスクワ住民の共同調査の結果も、それ自体は興味深いものであるが、447名の被験者のうちロシア人がほぼ90%を占め、タタール人など他のエスニック・グループはそれぞれ2%ほどしかないために、一般化については慎重さが求められることになる。また、北カフカスのアルメニア人の間では民族間の緊張度が高いこともあって、とりわけ民族間の差異の指標として「言語」の選択率が高く87%にも達している⁽⁴⁾。「言語」は、他のエスニック要因と深く絡み合っている、いわばエスニック・アイデンティティの中心的要因であり、同時にエスニック・コンフリクトの不可欠の指標として民族性、地域性を如実に反映する。小論でもこの点の重要性を認識した上で、データに対する解説を行なっていきたい。

ラトビアにおけるディアスポラとしてのロシア人

ウラディスラフ・ヴォルコフは、ラトビアで最も人気のあるロシア語の新聞“СМ-сегодня”

ロシアにおける言語とエスニック・アイデンティティの諸問題

表1 親和度調査「次のエスニック・グループにどの程度の親近感を持っていますか？」(2003年, %)

社会的距離	大変遠い	遠い	近い	大変近い	N.A
相手の民族名等	被験者 ロ シ ア 人				
ロシア人と	1.0%	0.7%	46.0%	44.0%	7.9%
モルドヴァ人と	4.4	13.2	49.3	7.5	25.1
モクシャ人と	6.9	16.8	37.5	6.2	32.6
エルジャ人と	6.5	18.6	37.1	36.9	14.8
タタール人と	20.1	21.5	25.9	2.7	29.7
ロシア正教信者と	1.7	2.7	52.2	23.2	20.1
ムスリムと	21.0	25.1	22.0	2.1	29.9
	被験者 モ ル ド ヴ ァ 人				
ロシア人と	1.2%	1.9%	64.2%	25.3%	7.4%
モルドヴァ人と	0.0	1.9	52.6	37.0	8.4
モクシャ人と	2.5	11.5	46.5	26.8	12.7
エルジャ人と	2.6	9.7	40.0	32.9	14.8
タタール人と	18.6	31.4	22.4	7.7	19.9
ロシア正教信者と	4.5	1.9	52.3	31.0	10.3
ムスリムと	23.5	36.6	13.7	5.2	20.9
	被験者 モ ク シ ャ 人				
ロシア人と	0.0%	5.1%	61.0%	23.7%	7.9%
モルドヴァ人と	0.0	0.0	55.2	34.5	10.3
モクシャ人と	0.0	0.0	40.0	48.3	11.7
エルジャ人と	3.6	19.6	33.9	17.9	25.0
タタール人と	22.2	24.1	20.4	9.3	24.1
ロシア正教信者と	5.5	1.8	50.9	29.1	12.7
ムスリムと	28.3	35.8	7.5	3.8	24.5
	被験者 エ ル ジ ャ 人				
ロシア人と	1.3%	0.0%	67.5%	23.4%	10.2%
モルドヴァ人と	0.0	2.8	49.3	39.4	8.5
モクシャ人と	5.5	19.2	47.9	13.7	13.7
エルジャ人と	2.7	2.7	41.3	48.0	5.3
タタール人と	18.9	39.2	21.6	8.1	12.2
ロシア正教信者と	5.4	2.7	54.1	31.1	6.8
ムスリムと	25.3	40.0	14.7	6.7	13.3
	被験者 タ タ ー ル 人				
ロシア人と	0.0%	16.7%	58.3%	20.8%	4.2%
モルドヴァ人と	20.8	33.3	33.3	4.2	8.3
モクシャ人と	26.1	30.4	30.4	4.3	8.7
エルジャ人と	25.0	29.2	29.2	8.3	8.3
タタール人と	0.0	8.0	32.0	60.0	0.0
ロシア正教信者と	0.0	30.4	47.8	8.7	13.0
ムスリムと	4.2	0.0	37.5	58.3	0.0

と“Панорама Латвии”の二誌を1992年と2000年の2時点で比較して記事の内容分析を行い、以下の結果を得た⁽⁵⁾。カッコ内の前者は1992年、後者は2000年における掲載記事の比率(%)である。

- I. ラトビアにおけるロシア語。その状態と公的地位、母語で教育(初等, 中等教育)を受ける可能性。 (14.9% < 52.6%)
- II. ラトビア共和国の国籍(市民権)と民族少数者(マイノリティ)。 (14.0% > 4.3%)
- III. 少数者全体の権利。主にロシア住民との関係におけるラトビア地域の諸問題。 (8.2% < 9.8%)
- IV. ラトビアにおけるロシア人の社会・政治的組織化。 (5.9% < 6.3%)
- V. ロシア人の市民的結束。ロシア人の民族意識と文化の再興。 (9.0% > 4.3%)
- VI. ラトビアにおけるロシア人居留の地政学的コンテクスト。 (2.6% < 5.2%)
- VII. ラトビア社会の統合の必然性とロシア住民の立場。ロシア人の国家的・領土的愛国主義。 (0.6% < 3.6%)
- VIII. 党の実践におけるナショナリズム。社会的組織化。ロシア嫌いの問題。 (44.8% > 13.9%)

現代のラトビアにおける言語的アイデンティティの諸問題に関するロシア人の関心の質的变化、および彼らの心理的な不安感やアイデンティティ・クライシスの量的変化が、上述の回答にも反映されている。1992年と2000年とを比較してみると、前者では市民権、ロシア人の市民的結束、党の実践におけるナショナリズム等の一般的な問題に比重がかけられているのに対し、後者ではロシア語の地位や母語で教育を受ける可能性、地域における少数者の権利、政治的組織化、ロシア人居留問題、ロシア人の地域アイデンティティ、といったぐあいに問題がより具体的かつ地域性を持っていることがわかる。

バルト三国は相互に隣接し、相対的に早い時期からロシアからの独立運動を基調とした民族運動を展開して、1989年に言語法を制定したという共通点を持ちながらも、なおそこにはロシア人の比率(リトワニアで相対的に低く、エストニアとはラトビアでは約30%と相対的に高い)等をはじめとする地域差、およびエスニック・グループに対する政策や文化的施策の相違があることを見逃すことはできない。言語法についてもその後、それぞれ個別に改正の動きが見られる。ただ、1992年という調査時点が言語法制定の直後であり、同法はいずれの共和国においても基幹民族語とロシア語との権利についての条文を中核としていることから、このことがロシア人のアイデンティティ・クライシスを刺激したことは疑いない。1992年において、「VIII. 党の実践におけるナショナリズム。社会的組織化。ロシア嫌いの問題」がほぼ半数の高率を占めているのは、こうした理由による。

その後、2000年までの10年近くを経てラトビアでの言語政策が具体化してくるのに伴い、ロシア人のエスニック・アイデンティティの意識はより具体的・集中的なものになり、「I. ラトビアにおけるロシア語。その状態と公的地位、母語で教育(初等, 中等教育)を受ける可能性」に言及する論考が3-4倍近くに急増したものと考えられる。

さらに、1992年と2000年の両時点における論文の内容(論調)には、どのような差が生じたであろうか。ヴォルコフは主な変化の特徴として次の3点を指摘している。(カッコ内の数字は1992:2000年の%)

- 1. ロシア人のアイデンティティは、ラトビアにおける社会化に対する可能性を含んでおり、積極的な連合を引き起こす。 (11.2% < 28.1%)

2. ロシア人のアイデンティティは、一種の烙印のように否定的な心理学的特質のセットの形で、外から押し付けられたもののように思われる。「またもや歴史の軛のもとで」「われわれは風に舞う埃ではない」など。(80.2% > 56.9%)
3. 混合的なもの (8.6% < 15.0%)

自らのアイデンティティとの関連で否定的な感情を基調としたような論考は、3分の1ほどに減少しており、逆にラトビアでうまく生きていくための重要な手段と見る論調が増加していることは、ロシア人の民族的自己意識の強化と見ることができる。1999年に、ラトビアでのロシア人の選挙活動が一定の成果を挙げたことも大きく作用しているだろう。1992年の3月には“С М — с е г о д н я”が、「民族国家—民族少数者」支持派と反対派との討論を特集するなどの動きを見せている。1990年代の間にラトビアでは、ウクライナ人、ユダヤ人、エストニア人、リトワニア人、ポーランド人など民族少数者の学校での教育の伝統が形成されたが、それはロシア人とはまったく異なった方法が採られている。つまり、彼らの母語は必ずしもアイデンティティの絶対条件とされていない。たとえばウクライナ学校ではウクライナ語とレット語で基本教科が教えられており、ユダヤ人学校ではロシア語、エストニア学校ではレット語とエストニア語、といったぐあいに母語の位置づけは一様でない。

ところがロシア人の場合は様相を異にする。上述の民族少数者の多くのエスニック・グループにとって、母語での教科目の導入はソビエト時代に比べて明らかな前進であったが、ロシア人にとっては、レット語によって大半の科目を教えようとする1999年以降の二語併用モデルは到底容認できないと感じられたことが窺われる。2000年の11月には、ロシア語での教授を支持する協会によって第1回全ラトビア「母語で学ぶ」父母大会が開催され、民族少数者の教育を母語で行うことによって多民族、多文化の実態にあった言語教育モデルを提示することが主張されたのである。

こうした動きはベロルシア人やウクライナ人にとっても無関心ではいられない事態であり、同年にラトビア国会によって採択された「ヨーロッパ連合統合戦略」(国家語による教授を行う学校への移行を企図)への回答として、ロシア人の組織団体はベロルシア人、ウクライナ人と協同で民族語、少数民族語による教育を保障するよう要求を行った。ロシア人の若者の多くはラトビア的なものとは違ったアイデンティティを希求しているが、一部の若者はそれに対して懐疑的である。

ヴォルコフは2000年に、ロシア語を教授言語とするリガの高等教育施設で調査を行い、70人の学生から自由記述の回答を得ている。「あなたはラトビアの民族的少数者の将来はどのようなものだと思いますか?」という問いに対して、大半は自分を民族的少数者と同一視していたが、一部にはそうしたカテゴリーそのものに疑義を感じている学生も見られた。その回答を以下に示しておく。

<ラトビアにおけるマイノリティ・アイデンティティ支持者の回答(複数回答)>

1. 民族少数者は社会的・法的な分野や言語・教育・文化の領域で差別を体験しているグループである。(19)
2. 国家はロシア語に法的地位を与えるべきである。(15)
3. ラトビアの民族少数者と言語に未来はない。(14)
4. 国家語としてのレット語(ラトビア語)の必要性は容認する。(14)
5. 少数者は、権利が守られないと外へ出て行ってしまうことになる。(8)
6. 国際交流の文化は、民族的なものよりも人類共通の価値を優先する。(8)
7. 政府は、ロシア語を社会・文化の分野から追い出す条件を作り出している。(8)

8. ラトビアの未来は少数者および少数言語と密接に結びついている。 (6)
9. 民族少数者の権利は人間の権利と密接に結びついている。 (5)
10. ラトビアでは、民族少数者の代表者というべき年配層が最も深刻に自分自身のことを受け止めている。 (5)
11. ラトビアの定住者の身分をパスポートでアイデンティファイするのはナンセンスである。 (4)

記述の具体的内容としては、「民族語とは、人間がそれによって思考するところのものである」「少数者の言語は国家と個人の富を形成する」「もしラトビアがヨーロッパ連合に加入すればロシア語が支持されるだろう」「民族少数者の独自性は社会統合政策と矛盾するものではない」「ラトビアにおけるロシア人の居住地でのロシア語の特別な地位が必要だ」「民族間の関係が先鋭化するのには2つの側面—国家と民族少数者—が原因である」「ラトビアのロシア人は人々の歴史的共同体である」「ロシア人は偉大な民族であり、どんな不利な状況も克服するだろう」「ロシアはラトビアのロシア人を忘れてしまっている」「非母語での教育は精神発達の遅滞をもたらす」「ラトビアでは歴史的にロシア文化とレット文化との相互作用が見られた」「ロシアと親しい関係を保つことが、ラトビアにおけるロシア人のアイデンティティを保持する重要な要因である」「自分の親友としてレット人をイメージすることは難しい」などがある。

ここには、ロシア人のレット人に対する（あるいはラトビア居住の他の民族少数者に対する）複雑な心情がさまざまに絡み合っており、ロシア人独特のアイデンティティを形成していることが窺われる。また当然のことながら、すでにレット文化への適応を遂げたと思われるロシア人の若者の中には、こうしたロシア人の「民族少数」観をことさら強調しようとする風潮に対して批判的なグループも存在する。「レット語はラトビアで生きていくにはどうしても学ばなくてはならない」「ラトビアで出世できるかどうかは国家語の知識にかかっている」「民族少数者の言語は家庭で発展することができる」「ラトビアで唯一の国家語はレット語である」「ラトビアでの民族少数者の諸言語は、その使用者が活着している間は残存するだろう」「民族・文化的社会の創設は民族少数者の復興の特徴である」などの声がそれらを代表している。

これらの回答の多様性そのものが、まさに現代のラトビアにおけるエスニック間の政治・経済関係の複雑なシステムを反映したアイデンティティのありようを示していると言えるだろう。

言語とエスニック・アイデンティティの形成過程

次に、専門的キャリアの成功要因について基幹民族がどのように考えているか、という点についてバシコルトスタン、ダゲスタン、カバルジン・バルカン、タタルスタンの4共和国住民で行なわれた調査結果から見ていきたい⁽⁶⁾。調査は1995年、各基幹民族2000人以上を対象に行なわれた。「熱心な努力」「支援してくれる家族」「高等教育」「素質・能力」などの項目は、当然のことながら、いずれも5割を超える高い数値を示している。一方、エスニシティに関連する「自民族の慣習遵守」「宗教儀式の遵守」は、他の項目に比べてキャリア推進の成功要因とみなされる率は低いが、「二言語以上の知識」はバシコルトスタン(24.0%)以外では相対的に高く、特にタタルスタン(41.5%)やダゲスタン(39.3%)ではかなり重要なキャリア推進の要因とみなされていることがわかる。カバルジン・バルカル(27.5%)は平均的な数値を示している。特に「リッチになりたい」基幹民族においては、親友との会話などの日常生活においてもロシア語が民族母語を上回って使用されていることが示された。バシキール人では74.7%に達しており、最低のマリ人でも6割がロシア語を日

常的に使用している。この数値は2002年調査のものであるから、これらのエスニック・グループにおいては現在でも、依然としてロシア語に対する選好性が保たれていることになる。

そこでバシコルトスタン为例にとりながら、大統領、選挙立候補者、公務員の使用言語の条件に対する調査結果を見ていこう。大統領の条件としてバシキール人であることを要求する率は、バシキール人以外では1-2割しかいない。また、バシキール語が使えることを条件とする者は、当該民族以外ではほぼ半数である。選挙候補者の条件としてバシキール語だけを駆使できる者という考え方は、全く支持されておらず、バシキール人自身においても約3割という低率である。また公務員の条件では、バシキール語やタタール語のモノリンガルはまったく問題にされず、バイリンガルからトリリンガル（ロシア語+バシキール語+タタール語）への移行が志向されている。1995年時点でのその数値は、ロシア語指示比の高いロシア人では31.0%、バシキール人は40.6%であるが、タタール人においては58.2%で最もトリリンガル指示比が高い。同様にバシコルトスタン居住者の駆使すべき言語としては、バシキール語、タタール語ともに指示率が低く、しかも当該民族自身の母語に対する選好性のポイントも低い。

それではバシコルトスタンに居住するロシア人は、今後どのような将来の生活設計を描けばいいのだろうか。基幹民族のバシキール人は民族母語を習得すべきという意見がもっとも強く、1993年に比べて95年にはほぼ2倍の56.8%になっているのだが、当のロシア人自身にとっては共和国にとどまって言語と文化の平等を達成したい願望が根強く、約8割の高率となっている⁷⁾。こうしたバシコルトスタンの特徴的なプロフィールは、学校教育にも大きな影響を与えることになる。

そこで次に、共和国の学校における基幹民族の言語教授に対して、基幹民族やロシア人はどのように考えているか、という点についてみていこう。〈表2〉は基幹民族語を必修科目として教えることに対する若者の回答であるが、バシコルトスタン、タタルスタン、マリイ・エル、ウドムルトのそれぞれの首都居住の若者は、基幹民族においては基幹民族語を必修科目とすることに賛成する者が多数を占めているのに対し、ロシア人の若者は、いずれも基幹民族語を必修科目とすることに反対する者のほうが多いものの、そこには地域差が見られる。タタルスタン以外ではロシア人若者の反対が半数以上となっているが、タタルスタンは3割ほどで相対的にロシア人若者におけるタタール語への親和性が高い。〈表3〉は教科目として基幹民族語を教えることの賛否を尋ねたものであるが、基幹民族の自民族語に対する選好性が最も高い共和国は北オセット、低いのはモルダビヤであり、約66パーセントの平均値となっている。ロシア人の支持率も北オセットで最も高く、ウドムルチャで最低の約21%である。ここでも地域差の大きさが目立っている。

バシキール語を国家語にすることについての可否に関する回答では、タタール人やロシア人の反対が多いのは当然とはいえ、興味深いことに基幹民族であるバシキール人においてもかなりの反対者がいることである。ロシア語が普及している中で改めてバシキール語を国家語にすることについて、かなりの抵抗感があることの反映であると思われる。〈表4〉はバシコルトスタンの学校における教授用言語に対する父母の回答であり、バシキール人、タタール人、ロシア人のいずれにおいてもロシア語指示比が高く、ロシア人においてはロシア語によるモノリンガル志向、バシキール人やタタール人ではロシア語と自民族語とのバイリンガル志向が強いことがわかる。バシコルトスタンでの必修科目に関する意識調査でも、バシキール人、タタール人ともに自民族語以外の民族語に対する親和性が低く、ロシア人はいずれの民族語に対しても選好性が低い、という調査結果が得られている。これらのことから、バシコルトスタンにおいてバシキール語を強制的に国家語や必修語としてもあまり効果が期待できず、民族語とロシア語とのバイリンガル（二語併用）教育を言語政策として行うことが実際的であると思われる。

表2 共和国の学校における基幹民族の言語教授に関する調査（1997年、首都の若者に対するアンケート）「ロシアを含む共和国のすべての学校において、基幹民族語を必修教科目として教えることについてどう思いますか？」に対する回答（%）

民族 都市	無条件に 賛成	どちらかといえば		無条件に 反対	N.A
		賛成	反対		
基幹民族	35.9%	30.0%	12.0%	4.9%	17.3%
ロシア人	13.0	24.1	23.5	19.1	20.3
その内訳； バシコルトスタン（ウファ）					
バシキール人	37.9	29.8	12.6	5.5	14.2
ロシア人	7.4	18.8	27.1	25.6	21.1
タタルスタン（カザン）					
タタール人	47.2	32.2	5.5	2.9	12.1
ロシア人	19.3	33.9	19.5	10.5	16.8
マリイ・エル（イオシカル・オラ）					
マリイ人	20.6	33.5	18.0	5.9	21.9
ロシア人	4.4	18.0	29.8	34.4	13.4
ウドムルト（イジェフスク）					
ウドムルト人	18.9	33.3	15.7	6.6	25.5
ロシア人	4.8	16.5	29.3	32.4	17.0

表3 共和国の学校における基幹民族の言語教授に関する基幹民族とロシア人の考え方（1997年）「ロシアを含む共和国のすべての学校において、基幹民族語を個別の教科目として教えることについてどう思いますか？」に対する回答（%）

共和国	基幹民族	ロシア人	
	賛成	賛成	反対
北オセット	82.6%	62.4%	24.6%
トゥワ	81.3	51.2	28.8
タタルスタン	79.4	53.2	30.0
ヤクーチヤ	78.3	43.6	37.6
カバルジン - バルカリア	77.7	60.9	18.7
アディゲヤ	77.2	47.6	37.5
カルムィキヤ	73.3	23.5	31.8
ブリヤーチヤ	75.9	42.3	33.8
バシコルトスタン	67.7	26.2	52.7
カレリヤ	64.2	30.7	47.7
コミ	57.5	24.4	56.0
マリイ - エル	54.1	22.4	64.2
ウドムルトチヤ	52.2	21.3	61.7
ダゲスタン	46.1	27.2	37.7
チュバシヤ	45.8	28.3	57.9
モルドビヤ	40.1	24.1	47.3
全体	65.9	37.1	42.6

表4 バシコルトスタンの学校における自分の子どもに学ばせたい言語（教授用言語）調査（％）

父母が自分の子どもに学ばせたい言語	民						族		
	バシキール人			タタール人			ロシア人		
	1993年	1995年		1993年	1995年		1993年	1995年	
	都市	都市	全体	都市	都市	全体	都市	都市	全体
一 言 語 の み									
バシキール語	8.1%	4.3%	8.1%	-	-	-	-	-	-
タタール語	-	-	-	3.3	3.0	3.4	-	-	-
ロシア語	6.6	14.0	6.6	13.0	16.8	11.1	54.1	60.6	61.7
二 言 語									
バ語+口語	62.8	59.4	72.5	9.6	9.6	7.0	28.3	21.0	20.1
タ語+口語	4.0	6.8	3.4	38.1	42.3	58.1	3.4	3.2	3.6
バ語+タ語	11.8	-	-	-	-	-	-	-	-
三 言 語									
バ+タ+口語	12.0	12.6	8.3	25.0	18.4	13.7	6.6	8.0	7.6
*N.A, および1-2% 回答者はこの表から除外									

選別装置としての言語機能が最も端的に発揮されるのは高等教育機関への入学試験，入社および昇格の際の言語能力等であるが，ここでは前者についてみていこう。<表5>はタタルスタン的高等教育機関入学者の受験言語調査であり，首都カザンの大学ではロシア語による受験者と合格者がタタール語のそれを2倍ほど上回っていることがわかる。やや規模の小さいアリメチエフスクではその差が縮まっているが，その要因は村落部出身者のタタール語での受験によるものである⁽⁸⁾。都市部では依然としてロシア語の選好性が高く，村落部でタタール語が主に使われていることの反映である。

このデータから，散居性の高い民族や少数民族の言語的同化度が高いことが明らかであるが，ここでモルドヴァにおけるエスニック・グループの言語能力のレベルを検討しておこう。モルドヴァ民族を構成する2つのエスニック・グループ（モクシャ人・エルジャ人）において，自民族語を自由に読み書きできる者は両グループとも約6割に過ぎず，モルドヴァ構成民族全体ではさらに低くなる。それ以外のエスニック・グループでの，両民族語に対する言語能力のレベルはさらに極めて低くなる。ところが，モクシャ人，エルジャ人，モルドヴァ人，ロシア人，タタール人すべてにおいて，ロシア語のレベルはほとんどが100%に近いのである。モルドヴァにおいてロシア語への言語的同化はその後進展していることが明らかとなったが，他のエスニック・グループでも同軌の傾向を示しているものは多い。前述したように，散居性の高い民族や少数民族の同化度は高くならざるを得ないが，生態学的・文化的特性，人類学的特性，人口学的特性，社会・経済的特性，家族の行動のエスニック的特性，外的環境の特性のほか，エスニック・ステレオタイプや，エスニック的結合のプロセス，新たなエスニック共同体の形成などが（少数）民族の安定性に関与的であると同時に，それらはまた当然不安定の要因ともなりうるということが明らかとなった⁽⁹⁾。

連邦崩壊後，ロシア人をはじめとしてエスニック・グループの移動が活発になるにつれて，同化の様相はより独特なプロフィールを描くようになった。たとえば「アルメニア移民」と「アルメニア

表5 カザン国立医科大学、カザン国立文化・芸術大学、アリメチエフスク地方立単科大学の入学者における言語行動（2002年タタール学校卒業生中）

種別	大学	上段；人数 下段；（%）	タタール語で の入試受験者	うち大学入学 者（合格者）	ロシア語での 入試受験者	うち大学入学 者（合格者）
願書提出者	カザン国立医科大学	111名 100%	36名 32.4%	20名 55.5%	75名 67.6%	49名 65.3%
	カザン文化・芸術大	249名 100%	75名 30.1%	39名 52.0%	174名 69.8%	79名 45.4%
	アリメチエフスク大	69名 100%	31名 44.9%	31名 100%	38名 55.1%	38名 100%
タタール学校卒業生内訳：都市部出身者	カザン国立医科大学	56名 100%	6名 10.7%	3名 50.0%	50名 89.3%	32名 64.0%
	カザン文化・芸術大	135名 100%	34名 25.0%	19名 14.0%	101名 75.0%	43名 31.8%
	アリメチエフスク大	31名 100%	10名 32.2%	10名 100%	21名 67.7%	21名 100%
タタール学校卒業生内訳：村落部出身者	カザン国立医科大学	55名 100%	30名 54.5%	17名 56.6%	25名 45.4%	17名 68.0%
	カザン文化・芸術大	114名 100%	41名 36.0%	20名 17.5%	73名 64.0%	36名 31.5%
	アリメチエフスク大	38名 100%	21名 55.2%	21名 100%	17名 44.8%	17名 100%

系モスクワ人」においては、前者が11のファクター（1-社会・職業グループ，2-年齢，3-学歴，4-役職・部門別・就業，5-モスクワでの居住期間，6-被験者が最も自由に駆使できる言語，7-母語，8-モスクワに移住するまでの被験者の居住地，9-自己評価による母国，10-アゼルバイジャンに対する関係，11-トルコに対する関係）の間に相関が見られるに対して，後者では上記ファクターのうち，8，10，11には相関の見られないタイプとなっている。また「タリンにおけるロシア人」と「タシセントにおけるロシア人」を比較してみると，両者ともに6つのファクター（1-年齢，2-職業，3-母国の意識，4-共和国国家語の自由な知識，5-自分の生活に対する評価，6-1990年までの共和国での生活に対する関係）の間に相関が見られるが，指標間の相関は前者のほうがより強い。ここには，ディアスポラにおける母語や自由に駆使できる言語，あるいは国家語との相関におけるそれぞれのエスニック・グループの社会・エスニック特性が示されている⁽¹⁰⁾。それではこれらのエスニック・グループにおける同化の位相はどのようなものであり，指標としてはいかなるものが考えられるだろうか。ここでは主として社会・心理学的指標について見ていきたい。

レデエバラは，ザカフカスのロシア人先住者（1987-89年調査），レニングラード州のヴェプス人（1987-88年調査：カレリア人近縁の少数民族），クリミア地方のクリミア・タタール（1990-91年調査），カザフスタン，ウズベキスタン，アルメニア，アゼルバイジャン，エストニア，リトワニア，ウクライナ居住のロシア人グループ（1994-96年調査）を，同一の方法を用いて広範な調査を行い，異文化の環境下に居住する40以上のエスニック・グループの比較・分析を行っている⁽¹¹⁾。これらの調査結果は，まさに民族の地域研究の成果とも言えるものであるが，中でも各エス

ニック・グループにおける安定性の「揺らぎ」の過程に対する指標（マーカー）は、変動するロシア諸民族のアイデンティティを考察する上できわめて興味深いものである。そこで、その指標を概観しつつ民族、文化、言語等の問題点を考えていくことにしたい。

エスニック文化グループの状態における社会・心理学的指標

A. エスニック自己ステレオタイプ（自己のエスニック・グループ）

これは、エスニック自己ステレオタイプにおける肯定的価値成分と否定的価値成分との相互関係で示される。肯定的なグループ自己評価は発達した「われわれ」感情、エスニック間、グループ間での独立した主体としてのグループ内自己意識の反映、肯定的なグループ・アイデンティティの反映とみることができる。ただし、肯定的価値成分が大半を占め、否定的成分がほとんどみられないような場合は、社会・心理学的防衛機構の「解発」、自己評価の不適合であることも多い。否定的価値成分が圧倒的に優勢である場合はグループ成員としてのアイデンティティの崩壊、「われわれ」感情の崩壊であり、自己のエスニック・グループへの帰属意識がきわめて弱いことを示す。

マリヤ・ゲルシモワは、モスクワに居住するロシア人、朝鮮人、アルメニア人、タタール人、グルジア人等のエスニック・グループにおける生徒や若者を対象とした自己ステレオタイプの調査を行っているが、その指標としての肯定的価値成分は、＜勇敢、礼儀正しさ、社交的、誠実、知的、誇り高さ、自由への愛、勤勉、親切、歓待、気前よさ、平和愛好、謙虚＞の13項目、また否定的価値成分は、＜怠惰、ずるさ、冷酷、臆病、攻撃的、貪欲、腹黒さ、凶々しさ、嘘つき、意志薄弱、横柄、偽善、羨望＞の13項目である⁽¹²⁾。

上記項目のうち、自分の民族に該当すると思われるものを選択させることによって、そのエスニック・グループの自己ステレオタイプのプロフィールを描くことができる。たとえば、ロシア人は「礼儀正しさ」と「謙虚さ」以外の肯定的価値成分のすべてにおいてポイントが相対的に高く（最も高いのは「勇敢」）、否定的価値成分のポイントは概して低い、「怠惰」の項目だけは有意に高い。朝鮮人では「勇敢」は低く「勤勉」「礼儀正しさ」「歓待」は高い。アルメニア人では「勇敢」が極めて高く「知的」「誇り」がそれに次いでおり、肯定的価値成分のポイントが全体的に高いが、同時に否定的価値成分である「ずるさ」のポイントも高くなっている。タタール人やグルジア人では「歓待」が高い点は共通しているが、先にも少し触れたように、アルメニア人やグルジア人で「勇敢」のポイントが高いのに対してタタール人では低く、タタール人には否定的価値成分のうち「怠惰」「臆病」「ずうずうしさ」「嘘つき」「横柄」「偽善」は皆無である反面、「ずるさ」のポイントが高い、といった特徴が見られる。

これらの項目は、次の「B. エスニック他者ステレオタイプ」でも利用することが可能で、自己ステレオタイプと他者ステレオタイプを対比することによってエスニック・グループ間の緊張関係や社会的距離などを測定することができる。当該エスニック・グループの成員は「勇敢」と思っているとしても、他のエスニック・グループからは「臆病」と見られているような場合、その理由を分析することが必要である。

B. エスニック他者ステレオタイプ（他のエスニック・グループ）

これも同様に、肯定的価値成分と否定的価値成分との相互関係で示される。否定的価値成分が圧倒的優勢である場合は、当該エスニック・グループを異文化の影響から「防衛」し、自文化の保全を第一義的なものとする排外・排斥的傾向と見なすことができる。上記Aの自己ステレオタイプが肯定的で、さらに他者ステレオタイプの肯定的価値成分も優勢であれば、他者の肯定的イメージ、

エスニック・トレランス、異文化への適応可能性等の前提が満たされた安定的状態にあると考えられる。逆に、グループ内の否定的評価と他者ステレオタイプの肯定度が圧倒的優勢であるような場合、当該エスニック・グループの結束度は弱体化していると考えられる。

前述したように、自己ステレオタイプのデータと他者ステレオタイプのデータを比較することで、エスニック・グループ間相互の関係が具体的に見えてくることが多い。マリヤ・ゲラシモフの調査データを分析してみると、一般的に次の二つの傾向が見られる。①肯定的価値成分については、自己ステレオタイプのポイントが他者ステレオタイプのポイントを上回り、逆に、②否定的価値成分のポイントでは他者ステレオタイプのほうが自己ステレオタイプを上回る傾向、いわば自己には甘く他者には厳しく、という傾向が見られる。

たとえば、ロシア人生徒の3分の2は自民族を「勇敢」とみなしているが、他民族における「勇敢」に対するロシア人のポイントは有意に低い。具体的には、「カフカス人」全体とグルジア人における「勇敢」に対しても、ロシア人生徒は自民族の15-20分の1のポイントしか与えていない。唯一の例外は、チェチェン人に対するポイントである。今回のテロ事件に見られるようにその行為の是非は兎も角として、自爆すらも厭わないチェチェン人の「勇敢」さを、ロシア人は無視することはできないということであろう。

また、ロシア人が「勇敢」の次に自民族の特性としてあげた「親切」は、彼らに近いはずのウクライナ人やベロルシア人といった他のエスニック・グループに対する「親切」評価においても、ロシア人の自己評価に比べると10-15分の1のポイントに急落してしまう。このような自己ステレオタイプと他者ステレオタイプの「非対称」性は随所に見られるが、すべての項目において前述の①、②が当てはまるわけではないことは、ここで改めて指摘するまでもなからう。とはいえ、ほぼその傾向は一般的である。

「自己ステレオタイプ」(以下ESと表記)と「他者ステレオタイプ」(以下ASと表記)の組み合わせは以下の4カテゴリーに類別できる。

<Ⅰ>. ES1+AS2; あるエスニック・グループのESと他のエスニック・グループによるAS(たとえばタタール人による自らのタタール人に対する評価とロシア人によるタタール人評価)

<Ⅱ>. ES1+AS1; あるエスニック・グループの典型(的人物)のESとAS(たとえばタタール人による自らのタタール人に対する評価とタタール人によるロシア人評価)

<Ⅲ>. ES1+ES2; 基幹民族と当該共和国在住のロシア人のES

<Ⅳ>. AS1+AS2; 2つのエスニック・グループのAS, 基幹民族と当該共和国在住のロシア人の考え方

これを図示してみると次のようになる。



C. 外部エスニックグループからの文化借用

C-1 文化の相互作用に対する肯定的評価と否定的評価との関係

自文化に対する他文化、他文化に対する自文化の影響に関する肯定的評価がともに高い場合は、異文化へのトレランスが高いと見なされる。自己の文化の成熟度も高く、異文化への理解度

も高いからである。他文化に対する自文化の影響を肯定的に評価し、かつ自文化に対する他文化の影響を否定的に評価している場合は、他文化を自文化のエスニック・アイデンティティに対する脅威とみて自文化の防衛的機制を作動した結果であることが多い。特に基幹民族が、当該地域では数的にもエスニック文化的にも少数派になっているような場合、こうした現象がよくみられる。他文化に対する自文化の影響を否定的に、また自文化に対する他文化の影響を肯定的に評価しているケースは、グループ内の文化的な不満の表出とみることができ、自文化がアイデンティティの基盤となっていないことを示している。

C-2 文化的借用の否定

異文化に対する拒否、あるいは他のエスニック・グループとの差異が自覚的でない場合がこれにあたる。長期の文化的接触によって、文化変容が古くから日常化しているケースもこれに含めていだろう。他のエスニック・グループに対する認知を自覚化させる方法としては、「社会的距離尺度」測定法などがある。

D. 他の「自民族」グループの社会的・認知（知覚）的イメージ

たとえば、ロシア領域外居住のロシア人に対して「ここに住んでいるロシア人と、ロシアに住んでいるロシア人とでは違いがあると思いますか？」と質問して、「違いがあるとすればそれは何か」という回答を得ることによって標記のイメージを知ることができる。自分のグループ（ここに住んでいるロシア人）の肯定的評価がロシア居住のロシア人よりも上回っていれば、グループ・アイデンティティ、「われわれ」感情の満足度が高く、異民族の環境下で当該グループによく適応していることがわかる。逆に、ロシア居住のロシア人に対する肯定的評価が自分のグループのそれを上回っている場合には、当該グループの結束力の弱体化、成員の不満の増加と帰属意識の低下が考えられる。

E. エスニック内・エスニック間におけるコミュニケーションの重要度

両親、子ども、配偶者、仕事での友人、同じ考えの人、親友、*~人（たとえばアゼルバイジャン人、グルジア人など）、上司、*地域（回答者の提示するエスニック・カテゴリー）、部下、に対する関係が「このうちで、あなたにとってはどの人との関係が最も重要ですか。またそれはどうしてですか？」といった質問によって明らかにされる。*印はエスニック間、それ以外はエスニック内の指標となるので、前者が多ければエスニック間、後者が多ければエスニック内のコミュニケーション志向が強いことを示す。成員全体で前者が圧倒的優勢である場合は、グループ・アイデンティティそのものが危機的状況にあると考えられる。

F. 人生の意義実現の満足度

異文化の条件下におけるエスニック・グループの適応、不適応の過程は標記の指標に反映される。満足度が高い場合は、当該エスニック・グループに対する適応状態が良好で、グループへの帰属意識、グループ・アイデンティティも高度に維持されているが、逆のケースではグループの規範等のゆるみから、さらにはグループ成員の離脱志向を反映していることも多い。＜私の人生は＞「私の手中にあり、自分でコントロールできる」「自分の天分がはっきりしており、明確な目標を持っている」「興味深い事柄で満たされている」「毎日が常に新しい」といった肯定的項目と、対極にある否定的項目を7点法で記入し、人生の満足度を調査する。

G. 移民（移住）志向性

標記の志向性が全般的に高いグループは崩壊の確率が高い。「人間は都市に住むべきだ」「若者は新しい土地で生活するほうがよい」「機会があればすぐにでもここから出ていきたい」「古い者と折り合いが付かないなら他の土地に行くほうがよい」などの項目の点数が高い場合がそれにあたる。

H. 自己アイデンティフィケーションにおけるエスニック成分の表示度

この調査にはアメリカの社会学者 (Kuhn, M. & Mc Partland) の「私は誰？」法が用いられている。被験者には何度か上記の質問に答えてもらうが、他の質問の影響を受けないよう、会話のはじめに挿入される。データ処理後、当該エスニック・グループの成員におけるエスニック自己評価の平均序列番号がカウントされる。1に近い序列番号の場合 (通常は3-4以上にはならない) は、グループ成員にとってエスニック所属の重要度が大きく、常にエスニック成分を意識せざるを得ない緊張状態にあると考えられる。

「私とは何か？」の問いに対する「私とは<>である」の回答の内容を分析することによって、以下のような自己概念の特性を明らかにすることができる。

1. 客観的特性

A. 個別的生活のカテゴリー；人物、性別、年齢、家族、職業

B. エスニック政治的カテゴリー；民族、宗教、サブカルチャー、共和国市民、ロシア市民、ソ連邦市民、

2. 主観的特性 (自己評価, 自己規定)；イデオロギー的性格の自己評価, 肯定的・否定的自己評価と役割的性格

最近の傾向として、いずれの共和国においても基幹民族に比べてロシア人の「民族」選択率がきわめて低いことが目につくが、それはロシア人のかつての栄光の凋落を反映したものと見てよからう。北オセチアやサハでは基幹民族よりもロシア人の方が「宗教」の指示比が高いという興味深いデータがあり、ここにもロシア人が地域への同化を余儀なくされている事情が窺われる。

エスニック政治的カテゴリーは北オセチアの集団的自己概念で最も活性化しているが、これは緊迫した日常的なエスニック・コンフリクトの結果であることはいままでもない。同地域にあっては、基幹民族のみならずロシア人もきわめて不安定な状況におかれているために、「民族」をはじめとするすべてのエスニック政治的カテゴリーの項目が、他の地域のロシア人より指示比が高くなっている。逆に、トゥバではエスニック政治的カテゴリーの項目の選択率の低さが目立つが、これらの選択率には、地域における当該民族の人口比や社会的ステータスといった要因が作用している。

「私は何か？」という問いに対して、「当該共和国の市民」であることと「ロシア連邦の市民」であることのどちらかで「私は<>である」と答えるかは、エスニック・アイデンティティの帰属意識を考える上で重要である。北オセチアでは、基幹民族、ロシア人ともに当該共和国の市民とみなす率が高く、前者ではほぼ3割、後者で4割である。たださすがにロシア市民とみなす者は、ロシア人では5割を越すのに対して、オセット人では1割をやや上回る程度となっており、北オセチア在住のロシア人のロシア志向は他の地域より根強い。逆に言えば、それだけ彼らの人種的疎外感が深刻であるということでもある。だが概して、ロシア人にとっては他の基幹民族よりも「民族的連帯」志向はさほど高くない。

また被験者の母国 (祖国) を問う質問なども、このカテゴリーの中に収めることができよう。キルギス居住のロシア人 (N=689) に対する Barrington, L. の調査 (1999年発表) では、キルギス (57.8%)、ロシア (18.0%) を母国と考えているロシア人が多いが、それ以外にもキルギスの都市やロシアの都市、地方、かつてのソ連邦、カザフスタン、ウクライナ、生誕地、居住地など、それぞれ5%未満ながら多様な「母国」名が報告されている。ビシユケクにおける、ロシア語使用者に対する「あなたが“われわれ”“私たち”と思えるような共同体はどのようなものですか？」という質問では、1996年 (N=304)、98年 (N=325) とともに最も多かった回答 (複数回答) が「家族・親類」(31.6% : 57.5%) であるが、2位以降の上位はすべてエスニシティに関連しており、「ロシ

ア」(29.6:32.9)「かつてのソビエト民族」(21.1:25.8)「キルギス市民」(26.0:24.6)「キルギスのロシア人」(20.1:23.4)となっている。また「自分と同世代」(13.1:32.0)の急増ぶりも目につく。ビシュケクにおいてはさらに、1996年と98年に残留希望者(N=129:N=187)と移住希望者(N=144:N=105)についても同様の質問を行い、興味深いデータを得ている。

中都市リュビンスクでの1997年調査(N=897)では、最も多かった回答(複数回答)が「ロシア人」(45.3%)で、エスニシティに関連するものとしては「かつてのソビエト民族」(11.7)「ロシア市民」(31.9)があり、「リュビンスク住民」(38.5)「家族」(51.3)「自分と同世代」(16.8)「自分と同じ興味をもつ人」(16.8)「仕事の種類や職場が同じ人」(6.7)等が続いている⁽¹³⁾。

これらのデータのプロフィールを共時的、通時的に比較することでよりダイナミックな分析が可能になる。

I. エスニック所属に関わる感情

「あなたが**人(たとえばロシア人)であることで、どのような感情が生じますか?」といった問いに対して「誇り、優越感、自信、悔しさ、恥ずかしさ、罪悪感、侮辱、抑圧感、その他」等のリストのうちから一定傾向の回答を得ることで、当該エスニック・グループのアイデンティティの動態が分析可能になる。否定的なキーワードが多い場合には、エスニックの外部グループに親和性が認められることが多い。

エスニシティの帰属意識や自己概念を考える際に重要なのは、「あなたと他の人々が同じ民族であると感じるのはどういうことによりますか」「どのような場面でああなたは自分の民族性を最も強く意識しますか」などの回答の内容を分析することである。前者の問いに対しては、言語、文化、祖国の自然、民族的心理、歴史的過去などが回答の主要なキーワードとなるが、こうした項目を民族の連带的要素とみなす傾向は、各共和国在住のロシア人よりも基幹民族の方により顕著である。とはいえ文化・伝統的要因の指示率ともなれば基幹民族が74%、ロシア人が62%とその差は縮まり、ロシア人の民族的伝統の誇りが根強い。最も文化・伝統的なものに大きな意義を付与しているのはオセット人であり、「祖国の大地」と結びついたこうした要因は、ヤクート、トゥバ人のみならず、タタルスタン在住のロシア人にも見受けられるのである。

また、民族性を強く意識する場面を問う後者の質問に対しては、文化(母語、国民芸術、文学、祝日)、宗教性(モスクや聖地等への参拝)、政治的行為(集会、運動への参加)、歴史的記憶などの回答のカテゴリーが考えられるが、エスニック・コンフリクトの高まっている地域ほどこれらの項目の選択率が高い。

J. 人種差別に対する感受性

「あなたもしくはあなたの家族の誰かが、民族的出自の故に自分の権利や可能性を奪われたことがありますか?」という問いに「はい」と答えた場合、「職場での人員配置、昇進、職場の仲間とのつきあい、文化の領域、生活保障、サービス、政治的権利、教育、その他」等の具体的場面を回答、さらに人種が原因で「話しかけてもあからさまに無視される、陰口、悪口、侮辱的な言葉、嘲笑、あからさまな軽蔑、おどし、嫌がらせ、ちょっかいを出す、暴力、殺人、退去や転居を余儀なくされた、はっきりとした差別というわけではなかったが自分に対する悪意を感じるがあった、差別は全くなかった」等の差別のレベルが調査される。こうした差別が日常的にさまざまなレベルで繰り返されると、病的な場合には被害妄想におちいることもある。

K. 外部グループとの文化的距離

「あなたの個人的経験から判断して、どのような種族の人が~人(たとえばロシア人)に最も近いと思いますか?また最も遠いと思いますか?」といった調査を行い、その回答が分析される。前

者の比率が高ければエスニック間の親和性が高く、外部グループとの関係は安定している。後者の比率が高い場合には、エスニック・コンフリクトが高まっており、社会・心理学的な防衛機制が活発化して他のエスニック・グループを脅威と見なしていることが多い。

L. 社会的援助

「あなたの親類のうちの誰がアゼルバイジャンに住んでいますか？また親類の誰がロシアに住んでいますか？」「あなたの最も仲の良い親友を3人あげて、その人たちの民族名を教えてください」「アゼルバイジャン共和国からロシアに移住していったあなたの親類や知り合いは多いですか？」といった問いの回答によって、他の地域居住社との接触状況が明らかになる。接触状況が密であれば相互のエスニック・アイデンティティが良好に保持されていることが多い。ただ当該地域を離脱しようとする移住志向が強い場合、情報源として一時的に接触状況が高まることもあり、その点を区別しなければならない。

エスニック・グループの社会・心理学的モデルおよび規定要因

<1> エスニック文化グループの「健全」モデル

- A. 肯定的自己ステレオタイプ>否定的自己ステレオタイプ
- B. 肯定的他者ステレオタイプと否定的他者ステレオタイプとの安定的バランス
- C. 外部エスニック・グループからの肯定的文化借用の優勢
- D. 自分のグループ（対、他のグループ）の肯定的な社会的・認知（知覚）的イメージ
- E. エスニック内コミュニケーションに対する適度の選好性
- F. 人生の意義実現の高い満足度
- G. 低度の移民（移住）志向性
- H. 自己アイデンティフィケーションにおけるエスニック成分の低い表示度
- I. エスニック所属に関わる肯定的感情の優勢
- J. 人種差別を感じない
- K. 外部グループとの文化的距離が少ない
- L. 社会的援助の存在

<2> 「分裂」移行期モデル

- A. 肯定的エスニック自己ステレオタイプ（自己のエスニック・グループ）の圧倒的優勢
- B. 否定的エスニック他者ステレオタイプ（他のエスニック・グループ）の圧倒的優勢
- C. 外部エスニック・グループからの肯定的文化借用が最小限、あるいは皆無
- D. 他のグループと比べて過度に肯定的な自己グループの社会的・認知（知覚）的イメージ
- E. エスニック内コミュニケーションへの明白な選好性
- F. 人生の意義実現の満足度の低下
- G. 移民（移住）志向性の増加
- H. 自己アイデンティフィケーションにおけるエスニック成分の表出
- I. エスニック所属に関わる過度の肯定的感情と否定的感情の出現
- J. 人種差別を感じるが多くなる
- K. 外部グループとの文化的距離の増大
- L. 社会的援助の低下

<3> 「分裂」モデル

- A. 否定的なエスニック自己ステレオタイプ（自己のエスニック・グループ）の激増
- B. 否定的なエスニック他者ステレオタイプ（他のエスニック・グループ）の圧倒的優勢（極端なケースでは肯定的ステレオタイプの圧倒的優勢）
- C. 他文化に対する自文化の影響力を否定的に評価し、自文化に対する他文化の影響力を肯定的に評価
- D. 他のグループと比べて否定的な自己のグループの社会的・認知（知覚）的イメージ
- E. エスニック間コミュニケーションへの選好性
- F. 人生の意義実現の低い満足度
- G. 移民（移住）志向性の二極化
- H. 自己アイデンティフィケーションにおけるエスニック成分の意識的（あるいは無意識的）抑圧
- I. エスニック所属に関わる否定的感情
- J. 人種差別に対する感受性が強く現れるか、またはみられない
- K. 外部グループとの文化的距離の急激な増大、または減少
- L. グループ内での社会的援助の困難な状況、グループ外メンバーへの社会的援助要請

<4> 外的・内的規定要因およびエスニック・グループの社会心理学的状態

外的要因（たとえば政治的作用；人種差別の強化など）は以下の現象をもたらす。

- A. 肯定的なエスニック自己ステレオタイプ（自己のエスニック・グループ）の激増、激減
- B. 否定的なエスニック他者ステレオタイプ（他のエスニックグループ）の激増、激減
- C. 否定的な文化間借用の急増
- D. 他のグループと比べて否定的な自己のグループの社会的・認知（知覚）的イメージ
- E. エスニック間におけるコミュニケーションの重要度の増大
- F. 人生の意義実現の満足度の低下
- G. 移民（移住）志向性の増大
- H. 自己アイデンティフィケーションにおけるエスニック成分の急増
- I. エスニック所属に関わる否定的感情の形成
- J. 人種差別に対する感受性の先鋭化
- K. 外部グループとの文化的距離の増大あるいは減少
- L. 社会的援助の弱体化、断絶

むすびにかえて

エスニック文化環境の主要な役割は、エスニック・グループにおける好適な相互理解の条件をつくり出すことにあるが、その作業は容易ではないことはこれまで見てきたとおりである。かつてはロシア語の習得がしばしば異民族混住地域へのエスニック・グループの適応的媒介物となっており、同時に当該民族区での階層上昇力の有効なファクターでもあったが、ペレストロイカ以降、各共和国の「言語法」においてロシア語の特権的地位が低下した現在では、様相は大きく様変わりしてきている⁽¹⁴⁾。言語的選好性の問題は単にその言語に対する愛着といった個人的レベルの問題ではなく、社会的圧力による部分が多い。つまり、当該言語を学ぶことが受験や就職に有利、出世するために不可欠といった理由で言語に対する選好性が規定される場合が多いのである。

連邦崩壊後はロシア語の社会的圧力が後退し、民族語、および英語をはじめとする外国語などが台頭するケースが目につくようになって来た。とはいえ、これまで何度も強調しておいたようにその現状にはかなりの地域差、階層差がみられ、言語的選好性はエスニック・グループ、居住地域、使用場面、年齢、性別、学歴、等によって大きく異なる。したがって、今後は言語的選好性を以下のような具体的なエスニック言語状況において検証し、要因間の相関を明らかにすることによって地域的特性をプロフィール化していくことが必要となるであろう。

A. 使用言語（家庭、友達、職場、公共の場、見知らぬ人との会話、等）、B. 母語（当該言語を母語と見なす理由、家庭・幼児期、学齢期、成人期の言語）、C. 相手の年齢層による使用言語（祖父母と、両親と、配偶者と、自分の子どもと）、D. 学校教育の言語（教授用言語と教科目言語；母語、ロシア語、その他）、E. ロシア語習得の状況（動機、時期、期間）、F. 理解できるジャンルとレベル（書物、新聞、ラジオ、テレビ等）、G. 二語併用の具体的場面における上位言語・下位言語的機能、H. 母語の機能（今後の使用状況、盛衰等）についての見通し、および母語以外の民族語やロシア語における言語的威信・選好性の変化。

今回の報告では十分に検討できなかった残された課題として、各民族地域における具体的な教育的・社会的状況の分析がある。たとえば上記 A, B, C などでは民族混住度や混合（異民族）婚などの人類学的・社会学的分析が必要であるし、D, E に関しても単にその形式面での分析を行なうだけでなく、各民族地域ごとの使用教科書、カリキュラム、二語併用教授法など心理学や言語学などの隣接諸科学にも踏み入った内容面での検討が不可欠であると思われる。筆者にとっては特に、若者のアイデンティティ形成とキャリアプランニングにおける D, E, F, G, H の教育的・言語的位相が興味深いのが、ここでは今後の課題として指摘するにとどめたい⁽¹⁵⁾。また、ロシア全体のセンサスについては詳細な最新データが現在公刊継続中であるために、今回の発表では敢えてセンサスデータを用いることをせず、主として社会学的調査データに依拠した。新センサスデータの検討と上記項目との複合的分析も今後の課題となるだろう。

註

- (1) ルリヤ『認識の史的発達』森岡修一訳、明治図書、1976
- (2) 石郷岡 建『ユーラシアの地政学』岩波書店、2004、p11
- (3) O.A.Богатова, Этнические границы в Мордовии парадокс многоуровневой идентичности, Социс. 2004.6
- (4) В.Н.Куницина, идр. Санкт-Петербургский Г.У. Факультет, Психологии Социальная Психология : диалог Санкт-Петербург-Якутск, Изд. С-Петербургского Унив. 2002
- (5) В.Волков, Русские в постсоветской Латвии сквозь призму лингвистической идентичности (1992-2000 гг.), Диаспры, М. 2002
- (6) М.Н.Губогло, Идентификация Идентичности, М. 2003
- (7) Ф.Г.Сафин, Контуры этносоциальной жизни в Башкортостане, Социс. 2001, 10, стр. 94-98
- (8) Л.М.Мухарямова, идр. Проблема доступности высшего образования для учащихся национальных школ: этносоциальные аспекты, Социс, 2004, 3, стр. 58-66
- (9) С.В.Соболева, Факторы Устойчивости Малых Национальных Групп, Новосибирск, 2000
- (10) Ю.В.Арутюнян, Армяне в Москве, Социс. 2001.11

ロシアにおける言語とエスニック・アイデンティティの諸問題

- Ю.В.Арутюнян, Русские в ближнем зарубежье, Социс. 2003.11
- (11) В.В.Степанов,Методы Этноэкологической Экспертизы, М. 1999. р176
- (12) М.Герасимова,Этнические стереотипы московских школьников, Диаспоры, 2002,2, стр. 83-108
- (13) Н.Космарская,<Русские диаспоры>: политические мифологии и реалии массового сознания, Диаспоры, 2002,2, стр. 110-156
- (14) М.Н.Губогло, Языки Этнической Мобилизации, М. 1998
塩川伸明『民族と言語—多民族国家ソ連の興亡1』岩波書店, 2004
- (15) 小論は,「日本学習社会学会第1回設立大会」(2004年9月11日,帝京大学)における課題研究<1>「世界の地域問題と教育・文化・学習」(コーディネーター:関啓子・一橋大学教授)での筆者の単独口頭発表レジメ(提案2「言語の観点から」)を大幅に縮小して部分的修正を施したものである。連邦構成主体における主要な地域アイデンティティの要因については,紙幅の都合で割愛した。